

百済王氏の東北補任

山下 剛 司

はじめに

百済王氏は古代朝鮮に存在した三国の一つである、百済国の王直系の子孫である。第三十三代百済国王義慈王の子である豊章と善光が質として来朝したことに端を発する。唐と新羅の連合軍との戦いで父王が亡くなると、百済の遺臣達に請われて王子豊章は帰国し戦争の指揮をとるが、唐軍に捕まり長安に移送されその生涯を閉じることとなる。

一方、倭国に留まった善光王子とその一族は、それまでは賓客として遇されていたが、持統朝の頃「百済王」の姓を与えられ、それ以降は倭国の一族として朝廷の中で活動していくこととなる。彼らの動静は奈良時代から平安初期にかけて、多方面においてその活躍を見出すことができる。その中でも特に、東北関係の官職[〔]に多く補任されていることが挙げられる。

何故、百済王氏の面々が多く東北関係の官職に補任されたのか、その理由については戦前から研究され、数々の論考が発表されてきた。

本論はそれらの先行研究を整理し、東北関係の官職への補任者を丁寧に見ることによって、先行研究とは異なる視点で、「何故、百済王氏が数多く東北関係の官職に補任されたのか」を再検討する。

先行研究では、百済王氏の東北関係の官職就任について、以下のような論が述べられている。

戦前には、村尾次郎氏が「奥羽建設と百済王氏」^②において「百済帰化人の有する技術的特色・東国経営は難事業のため世襲によつて人材を得るのが良法・母国百済の滅亡と王族百済王氏との精神的関係」から、百済王氏を中心として、百済系帰化氏族が団結して東国経営に参加したとした。

つまり、大陸または半島の先進技術を有していた百済王氏が、難事業であり、人員の確保に難しい東北経営に世襲によつて人材を派遣した。このことは、故国の百済王の子孫としての百済王氏と、他の百済系帰化氏族との精神的つながりを用いたためであるとした。

また、今井啓一氏は「百済王氏と蝦夷経営」^③において「百済系渡来氏族が、東北経営においてこそ活躍の場をみいだした。」と述べられたが、これは史料的根拠がなく、著者の感想に近いものである。

利光三津夫・上野利三両氏は「律令制下の百済王氏」^④の中で「故国回復のため、百済王氏の下に結集する百済系渡来氏族の軍事的活力を対東北経営に利用」したのだとした。しかし、この論も史料的根拠が示されていない。

以上の研究を受けて、榊原聖子氏は「帰化人の研究―特に百済王氏を中心として―」^⑤において、これらの研究はすべて百済王氏が東北関係の官職への補任が多いということをその論拠としているが、六国史などに記載にある百済王氏の補任を拾っていくと、東北関係官職への補任が多いのは確かだが、それらと同程度に西国の国司への補任も見出すことができる。このことから、今まで述べられてきたような論は成立しないのではないか、という指摘をされた。

榊原氏の論は、それまでの先行研究が史料的根拠を示さないうで、あくまでも百済王氏が東北関係の官職に多く補任されているという点のみを論拠としていたことに対する反論である。百済王氏の補任を各史料から丁寧に拾って、それを元に論じられたことは、それまでの先行研究とは大きく異なることであつた。

しかし、この榊原論文は百済王氏のみの補任を元に論じられていて、他の氏族との比較はなされていない。百済王氏内部のみの補任の多少を論じて、その氏族の特色を見出すことは難しいと思われる。

よって、本論では東北関係の官職に補任された人物を出来得るだけ拾い上げて、百済王氏と比較することによって、百済王氏の特色、また、何故東北経営に参加していったのかを考察する。

朝廷と東北

ここで、本論に関連する七世紀から九世紀にかけての、朝廷と東北地方の動向を簡単に確認しておきたい。

敏達天皇十年閏二月、蝦夷数千が辺境を犯す。綾糟の服盟。

舒明天皇九年、蝦夷が入朝せず。將軍上毛野君形名による征夷。

大化三年、淳足柵を設けて柵戸を置く。

大化四年、磐舟柵を置く。越国と信濃国の民を選んで柵戸として配す。

齐明天皇四年四月、安倍比羅夫が船軍百八十艘を率いて征夷。秋田・能代の蝦夷の降伏。渡島の蝦夷を饗応。

同年七月四日、蝦夷二百余人が朝貢。淳代郡の蝦夷と捕虜戸口を調査。

齐明天皇五年三月十七日、甘樫丘で陸奥と越国の蝦夷を饗応。

同月、安倍比羅夫が船軍百八十艘を率いて征夷。飽田・淳代・津軽・胆振鉏の蝦夷を饗応。肅慎と戦い、捕虜四十九人を奉る。

齐明天皇六年三月、安倍比羅夫が船軍二百隻を率いて肅慎人と交戦。

持統天皇二年十一月五日、蝦夷百九十余人が天武天皇に誅を奉る。

同年十二月十二日、蝦夷の男女二百十三人を饗応。

和銅二年三月五日、陸奥鎮東將軍巨勢朝臣麻呂と征越後蝦夷將軍佐伯宿禰石湯を派遣。

和銅五年九月二十三日、出羽国を設置。

養老四年九月二十八日、陸奥の蝦夷が按察使上毛野朝臣広人を殺害する。

同月二十九日、持節征夷將軍多治比真人県守・持節鎮狄將軍阿倍朝臣駿河等を派遣。

神龜元年二月二十五日、陸奥国鎮守の軍卒の本籍をこの地に移し、家族を呼ぶことを許す。

神龜元年三月二十五日、陸奥国海道の蝦夷が大掾佐伯宿禰兒屋麻呂を殺害。

神龜元年四月十四日、陸奥国の鎮所に物資を搬入。

神龜元年五月二十四日、鎮狄將軍小野朝臣牛養を派遣。

神龜二年閏正月四日、陸奥国の蝦夷の捕虜を伊予国・筑紫・和泉監に配置。

神龜五年四月十一日、陸奥国に白河軍団設置。

天平元年、出羽柵を秋田に移す。

天平二年正月二十六日、陸奥国田夷村の蝦夷を公民に編入。

天平九年正月二十九日、陸奥按察使大野朝臣東人軍が出羽に進出。

天平宝字二年十月二十五日、桃生城造営。

同年十二月八日、小勝柵の造営。

神護景雲元年十月十五日、伊治城の築城。

宝龜五年正月十六日、出羽蝦夷と俘囚を朝堂で饗応。

同年七月二十五日、陸奥海道の蝦夷が桃生城を攻撃。

宝亀七年二月六日、出羽国の兵四千人を動員して、陸奥国西辺の賊を討伐。

宝亀十一年二月二日、覚鯨城の築城。

同年三月二十二日、陸奥国上治郡大領伊治咎麻呂が反乱をおこす。

延暦三年二月己丑、大伴宿禰家持東征將軍となる。

延暦八年六月三日、紀臣朝古佐美軍、阿弓流為軍に大敗。

延暦十年七月十三日、大伴宿禰弟麻呂を征東大使、坂上大宿禰田村麻呂を副使に任じる。

延暦十二年二月丙寅、征東使を征夷使に改める。

延暦十三年十月丁卯、征夷大將軍大伴弟麻呂が征夷の戦果報告。

延暦十六年十一月丙戌、坂上大宿禰田村麻呂を征夷大將軍に任じる。

延暦二十年九月丙戌、坂上大宿禰田村麻呂の征夷。

延暦二十一年正月丙寅、胆沢城の建造。

同年四月庚子、夷大墓公阿弓利為と盤具公母礼ら五百人が降伏。

同年八月、夷大墓公阿弓利為と盤具公母礼らを斬刑。

延暦二十二年二月癸巳、志波城の築造。

延暦二十三年正月乙未、陸奥国小田郡中山柵に物資搬入。

弘仁二年三月甲寅、陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂ら爾薩体・幣伊を征す。

朝廷は、蝦夷を平定しその地に柵や城を築き、柵戸を配して朝廷が支配している土地と同様になるよう開発を行う。そして、田畑を開墾し、後には口分田を発給して郡・里として編成する。他国と同様に百姓が生活し、朝廷に

朝貢する。それに対し朝廷が百姓を保護するという政治形態を施行するのを目的とした。

その目的を遂行するためには、前記のように膨大な時間と人員を導入しなければならなかった。そして、その指揮官として京から派遣されたのが、東北関係の官職に補任された官人達であった。

東北に補任された官人

大宝律令が制定されてから、弘仁二年に対蝦夷戦争が終結するまでの間、東北関係の官職に補任された人物を時系列に沿って列挙すると、表1のようになる。

表1を見ると分るように、東北の関係官職に補任されている氏族には明らかな偏りがある。

表1から、東北関係の官職に多く補任された氏族とその人数を挙げる。

佐伯氏十一名・百済王氏十一名・大伴氏九名・藤原氏九名・紀氏八名・上毛野氏六名・坂上氏六名・石川氏六名・多治比氏五名・安倍氏四名・道島氏三名。粟田氏・下毛野氏・葛井氏・巨勢氏・高橋氏・小野氏・大野氏・田中氏・文屋氏・皇親が各二名ずつで他三十氏族が各一名ずつの補任となっている。

この氏族ごとにおける補任の人数差は、一体何を示しているのだろうか。

氏族ごとの持つ特色に着目することにより、東北関係の官職に多く補任された氏族、つまり、東北関係の官職の職務内容に適した氏族であると朝廷側が判断したその理由を明らかにしてみたい。

佐伯氏。

律令制が施行される以前から朝鮮半島への出征や、内乱に活躍することが多く、蘇我入鹿暗殺事件にも功があった。律令施行後も武官に任じられる者が多く、奈良末までに五衛府の長官を四人も輩出している。藤原宮以降の宮

表 1

年	官 職	官位姓名	備 考
慶雲二年	越後城司	威奈大村	十一月六日任(寧633)
慶雲三年	越後守	従五位上猪名大村	閏正月五日任(統紀)
慶雲四年	越後守	従五位下安倍真君	十一月二日任(統紀)
和銅元年	陸奥守	従四位下上毛野小足	三月十三日任(統紀)
和銅二年	越後守	従五位下安倍真君	三月十三日任(統紀)
	陸奥守	上毛野男(小)足	四月十六日卒(統紀)
	陸奥守	従五位上上毛野安麻呂	七月一日任(統紀)
	陸奥鎮東將軍	正四位下巨勢麻呂	三月五日任(統紀)
	征越後蝦夷將軍	正五位下佐伯石湯	三月五日任(統紀)
養老四年	征越後蝦夷副將軍	従五位下紀諸人	三月五日任(統紀)
	按察使	按察使正五位下上毛野広人	九月廿九日殺害(統紀)
	持節征夷將軍	正四位下多治比景守	九月廿九日任(統紀)
	征夷副將軍	従五位下下毛野石代	九月廿九日任(統紀)
養老五年	持節鎮狄將軍	従五位上安倍駿河	九月廿九日任(統紀)
	征夷將軍	正四位上多治比景守	四月九日還帰(統紀)
養老七年	鎮狄將軍	従五位上安倍駿河	四月九日還帰(統紀)
	出羽国司	正六位上多治比家主	九月十七日見(統紀)
神亀元年	陸奥大掾	従六位上佐伯兄屋麻呂	三月廿五日見(統紀)
	鎮守將軍・按察使	従四位上大野東人	多賀城碑に見按察使
	持節大將軍	正四位上藤原宇合	四月七日任(統紀)
	副將軍	従五位上高橋安麻呂	四月七日任(統紀)
	鎮狄將軍	従五位上小野牛養	五月廿四日任(統紀)
天平元年	鎮守將軍	従四位下大野東人	九月十四日見(統紀)
天平九年	陸奥大掾	正七位下日下部大麻呂	四月十四日見(統紀)
	出羽守	正六位下田辺難破(波)	四月十四日見(統紀)
	持節大使	従三位藤原麻呂	正月廿二日薨遣(統紀)
	副使	正五位上佐伯豊人	正月廿二日薨遣(統紀)
	副使	従五位上坂本宇頭麻佐	正月廿二日薨遣(統紀)
	判官	正六位上大伴美濃麻呂	四月十四日見(統紀)
	判官	従七位上紀武良士	四月十四日見(統紀)
天平十年	鎮守將軍	従四位下大野東人	四月十四日見(統紀)
	陸奥介	百済敬福	四月ヵ見(正倉院24-75)
天平十一年	鎮守判	余足人	四月ヵ見(正倉院24-75)
	鎮守將軍・陸奥按察使	従四位上大野東人	四月廿一日任参議(統紀)
天平十三年	越後掾	正七位下錦部男笠	五月廿七日解却見任(統紀)
天平十五年	陸奥守	従五位下百済敬福	六月卅日任(統紀)

天平十八年	陸奥守	從五位下百濟敬福	四月己酉任上總守(統紀)
	陸奥守	正五位下石川年足	四月己酉任(統紀)
	陸奥守	從五位下百濟敬福	九月十四日任(統紀)
	越後守	從五位下高橋国足	閏九月十日任(統紀)
天平勝宝元年	陸奥守	從五位上百濟敬福	四月一日見(統紀)
	陸奥介	從五位下佐伯全成	閏五月十一日見(統紀)
	陸奥大掾	正六位上余足人	閏五月十一日見(統紀)
	鎮守判官	從五位下大野横刀	閏五月十一日見(統紀)
天平勝宝四年	陸奥守	從五位上佐伯全成	五月廿六日任(統紀)
天平勝宝五年	越後守	從五位下平群人足	四月廿二日任(統紀)
天平宝字元年	陸奥守・鎮守副將軍	從五位上佐伯全成	六月十六日兼任鎮守副將軍(統紀)
	陸奥守	從五位下藤原朝弼(猗)	七月八日任(統紀)
	鎮守將軍・按察使	正四位下大伴古麻呂	六月十六日任(統紀) 左大弁兼任按察使七月二日見(統紀)
天平宝字二年	越後目	正七位上高麗馬養	六月四日任(統紀)
天平宝字三年	越後守	外從五位下陽胡玲璆	四月十六日任(統紀)
天平宝字四年	陸奥介・鎮守副將軍	從五位上百濟足人	正月四日見(統紀)
	出羽守	從五位下小野竹良	正月四日見(統紀)
	出羽介	正六位上百濟三忠	正月四日見(統紀)
	出羽掾	正六位上玉作金弓	正月四日見(統紀)
	鎮守將軍・按察使	正五位下藤原惠美朝弼(猗)	正月四日見(統紀)
	鎮守軍監	正六位上葛井立足	正月四日見(統紀)
	鎮守軍監	正六位上大伴益立	正月四日見(統紀)
	鎮守軍曹	從八位上韓袁哲	正月四日見(統紀)
天平宝字五年	陸奥出羽按察使	從四位下藤原朝弼	十月廿二日任仁部卿、陸奥出羽按察使如故(統紀)
	鎮守副將軍鎮国驍騎將軍	從五位下大伴益立	正月十六日任(統紀)
天平宝字六年	陸奥守・鎮守副將軍	從五位上田中多太麻呂	四月一日任(統紀) 閏十二月廿五日兼任鎮守副將軍(統紀)
	陸奥介・鎮守副將軍	從五位下大伴益立	四月一日任(統紀) 以前から鎮守副將軍(統紀)
	鎮守將軍・按察使	從四位上藤原朝弼	十二月一日見(多賀城碑)
天平宝字七年	出羽守	從五位下百濟三忠	正月九日任(統紀)
	越後守	從五位下石川弟人	正月九日任(統紀)
天平宝字八年	陸奥守・鎮守將軍	從五位上田中多太麻呂	四月十一日任(統紀) 九月廿九日兼任鎮守將軍(統紀)
	出羽員外守	從五位上佐伯美濃麻呂	十月三日任(統紀)
	出羽介	從五位下上毛野馬長	正月廿一日任(統紀)

	越後介	外從五位下船腰佩	九月廿五日任(統紀)
天平神護二年	出羽守	從五位下百濟文鏡	五月十日任(統紀)
	出羽介	從五位下坂上石楯	五月十日任(統紀)
神護景雲元年	陸奥守・鎮守將軍	正五位下石川名足	正月十一日任(補任宝亀九年条)
	陸奥少掾	外從五位下道島三山	七月三日任(統紀)
神護景雲二年	陸奥介・鎮守副將軍	從五位下田口安麻呂	二月十八日兼任鎮守副將軍(統紀)
	陸奥大掾・鎮守軍監	從五位上道島三山	二月十八日兼任鎮守軍監(統紀)
	鎮守將軍	正五位上石川名足	九月四日任(統紀)
	越後守	從五位下佐味宮守	閏六月三日任(統紀)
神護景雲三年	陸奥守	正五位上石川名足	八月十九日任(統紀)
	陸奥員外介	從五位上道島三山	二月五日任(統紀)
宝亀元年	鎮守將軍	正四位下坂上苅田麻呂	九月十六日任(統紀)
宝亀二年	陸奥守・鎮守將軍	從四位下佐伯美濃(三野)	閏三月一日任、兼任鎮守將軍(統紀)
	陸奥介	從五位下笠道引	七月廿三日任(統紀)
	越後介	外從五位下六人部広道	七月廿三日任(統紀)
宝亀三年	陸奥員外介	從五位下粟田鷹主	四月廿日任(統紀)
	越後守	從五位下粟田人成	十一月一日任(統紀)
宝亀四年	陸奥守・鎮守將軍・按察使	正四位下大伴駿河麻呂	七月任、鎮守將軍(補任宝亀六年条)七月廿一日兼任鎮守將軍、按察使(統紀)
宝亀五年	陸奥守・按察使鎮守將軍	正四位下大伴駿河麻呂	七月廿三日見、按察使鎮守將軍(統紀)
	陸奥介	從五位上上毛野稻人	三月五日任(統紀)
	出羽守	從五位下百濟武鏡	三月五日任(統紀)
	出羽介	外從五位下下毛野根麻呂	三月五日任(統紀)
	鎮守副將軍	從五位上紀広純	七月廿三日任(統紀)
	越後介	從五位下紀犬養	三月五日任(統紀)
	越後介	外從五位下六人部広道	六月廿三日任(統紀)
	越後介	外從五位下内蔵全成	九月四日任(統紀)
宝亀六年	陸奥介・鎮守副將軍	從五位上紀広純	九月十三日任、鎮守副將軍(統紀)
	鎮守將軍・按察使	正四位下大伴駿河麻呂	九月廿七日任參議(補任)
宝亀七年	出羽守	從五位上上毛野長馬	七月廿一日任(統紀)
	鎮守將軍・按察使	正四位上大伴駿河麻呂	七月七日卒(統紀)
	鎮守副將軍	從五位上佐伯久良麻呂	五月十二日任(統紀)
	越後守	從五位下石川宿奈麻呂	三月六日任(統紀)

宝亀八年	陸奥守・按察使	正五位下紀広純	五月廿七日兼任按察使(統紀)
	陸奥介	從五位下大伴真綱	正月廿五日任(統紀)
	鎮守副將軍	從五位上佐伯久良麻呂	十二月十四日見(統紀)
宝亀九年	鎮守權副將軍	從五位上佐伯久良麻呂	六月廿五日叙正五位下(統紀)
宝亀十年	出羽守	從五位下多治比乙安	九月廿一日任(統紀)
	越後守	從五位下広田王	二月廿三日任(統紀)
	越後守	從五位下清原王	九月十八日任(統紀)
宝亀十一年	陸奥守・征東副使	正五位上大伴益立	三月廿九日任(統紀)
	陸奥介・鎮守副將軍	從五位下大伴真綱	三月廿二日見、三月廿九日任鎮守副將軍(統紀)
	陸奥介	從五位下多治比字佐美	五月廿七日任(統紀)
	陸奥掾	石川淨足	三月廿二日見(統紀)
	鎮守副將軍・按察使	從四位下紀広純	二月一日任參議(統紀)
	鎮守副將軍	從五位上百濟俊哲	六月八日任(統紀)
	征東大使	從三位藤原繼繩	三月廿八日任(統紀)
	征東副使	從五位上紀古佐美	三月廿八日任(統紀)
	持節征東大使	正四位下藤原小黑麻呂	九月廿三日任(統紀)
	出羽鎮狄將軍	從五位上安倍家麻呂	三月廿六日任(統紀)
	越後員外守	從五位上上毛野稻人	四月廿七日任(統紀)
	陸奥守	從五位上紀古佐美	五月廿七日任(統紀)
天応元年	陸奥守・征東副使・鎮守副將軍	正五位下内藏全成	九月八日任、六月一日見征東副使(統紀)十二月一日兼任鎮守副將軍(統紀)
	持節征東大使	正四位下藤原小黑麻呂	六月一日見(統紀)
	征東副使	從五位下多犬養	六月一日見(統紀)
	征東副使	從四位下大伴益立	九月廿六日降階(統紀)
延暦元年	陸奥守・陸奥按察使・鎮守將軍	從三位大伴家持	見(補任)六月十七日任陸奥按察使鎮守將軍(統紀)
	陸奥介	外從五位下入間広成	六月十七日任(統紀)
	鎮守權副將軍	外從五位下安倍媛島墨繩	六月十七日任(統紀)
	越後介	從五位下三国広見	六月廿日任(統紀)
延暦二年	征東副使	從五位上大伴弟麻呂	十一月十二日任(統紀)
	越後守	從五位上上毛野稻人	二月廿五日任(統紀)
延暦三年	持節征東將軍	從三位大伴家持	二月己丑任(統紀)
	征東副將軍	從五位上文野与企	二月己丑任(統紀)
	征東軍監	外從五位下入間広成	二月己丑任(統紀)
	征東軍監	外從五位下安倍媛島墨繩	二月己丑任(統紀)
	越後介	外從五位下朝原道永	三月十四日任(統紀)

延暦四年	陸奥守・陸奥按察使・鎮守副將軍	從五位上多治比宇美	正月十五日任、二月十二日兼任陸奥按察使鎮守副將軍(統紀)
	出羽守・鎮守副將軍	從五位下百濟英孫	九月廿九日任(統紀)九月廿日任鎮守副將軍(統紀)
	鎮守將軍・按察使	從三位大伴家持	四月七日見(統紀)、按察使
	越後守	正五位下葛井道依	五月十五日任(統紀)
延暦六年	陸奥介・鎮守副將軍	從五位下佐伯葛城	二月五日任(統紀)兼任鎮守副將軍
	陸奥介	從五位下藤原葛野麻呂	二月五日任(統紀)
	鎮守將軍	正五位上百濟俊哲	閏五月五日左降日向權介(統紀)
	鎮守副將軍	從五位下池田真枚	二月廿五日任(統紀)
	越後介	從五位下朝原道永	三月廿二日兼任大学頭(統紀)
延暦七年	陸奥守・陸奥按察使	正五位下多治比宇美	二月廿八日兼任鎮守將軍(統紀)陸奥按察使
	鎮守副將軍	外從五位下安倍媛島墨繩	二月廿八日任(統紀)
	征東大使	正四位下紀古佐美	七月六日任(統紀)
	征東副使	從五位上多治比浜成	三月廿一日任(統紀)
	征東副使	從五位下紀真人	三月廿一日任(統紀)
	征東副使	從五位下佐伯葛城	三月廿一日任(統紀)
	征東副使	外從五位下入間広成	三月廿一日任(統紀)
	越後介	從五位下坂上田村麻呂	六月廿六日任(統紀)
延暦八年	持節征東大將軍	正四位下紀古佐美	七月十四日見(統紀)
	征東副將軍	外從五位下入間広成	六月三日見(統紀)
	左中軍別將	從五位下池田真枚	六月三日見(統紀)
	前軍別將	外從五位下安倍媛島墨繩	六月三日見(統紀)
	鎮守副將軍	從五位下池田真枚	九月十九日解官(統紀)
	鎮守副將軍	外從五位下安倍媛島墨繩	九月十九日解官取冠(統紀)
	鎮守副將軍	從五位下巨勢野足	十月廿二日任(統紀)
延暦九年	陸奥守・陸奥按察使	從五位上多治比浜成	三月十三日任(統紀)兼任陸奥按察使
	征夷大將軍	正四位下紀古左美	見(補任)
	越後守	從五位下坂上田村麻呂	三月十日任(統紀)
延暦十年	陸奥介・鎮守副將軍	從五位下文屋大原	五月廿二日任(統紀)二月廿一日兼任鎮守副將軍(統紀)
	征夷大將軍	正四位上紀古左美	見(補任)
	征夷大使	從四位下大伴弟麻呂	七月十三日任(統紀)

	征夷副使・鎮守將軍	正五位上百濟俊哲	七月十三日任(統紀)鎮守將軍九月廿二日任(統紀)
	征夷副使	從五位上多治比浜成	七月十三日任(統紀)
	征夷副使	從五位下坂上田村麻呂	七月十三日任(統紀)
	征夷副使	從五位下巨勢野足	七月十三日任(統紀)
	越後介	從五位下百濟忠信	七月廿八日任(統紀)
延曆十一年	陸奥介・鎮守府將軍	從五位下巨勢野足	九月二十七日任(補任弘仁元年条)
	出羽守	從五位下藤原仲成	二月任(補任大同四年条)
	征夷大將軍	正四位上紀古佐美	見(補任)
延曆十五年	陸奥守・陸奥出羽按察使・鎮守府將軍	從四位下坂上田村麻呂	五月廿五日任(補任延曆廿四年条)兼任陸奥出羽按察使 十月甲辰任鎮守府將軍(補任同条)
延曆十六年	陸奥守・征夷大將軍・按察使	從四位下坂上田村麻呂	十一月五日兼任征夷大將軍(吾妻鏡寿永三年正月十日条)按察使
	出羽守	從五位下百濟聰哲	正月十三日任(後紀)
延曆十七年	鎮守將軍	從四位上坂上田村麻呂	七月二日見(興福寺略年代記・清水寺縁起)
	越後守	從五位上藤原仲成	八月任(補任大同四年条所引弁官補任)
延曆十八年	越後守	從五位上藤原仲成	正月廿九日任(後紀)
延曆十九年	陸奥守・征夷大將軍・陸奥出羽按察使・鎮守府將軍	從四位上坂上田村麻呂	十一月六日見(類史)
延曆二十年	陸奥守・征夷大將軍・按察使	從四位上坂上田村麻呂	十一月七日叙從三位(補任延曆廿四年条)征夷大將軍按察使、十二月任近衛中将(補任延曆廿四年条)
	出羽權守	從五位下三諸綿麻呂	閏正月廿六日任(補任弘仁元年条)
延曆二十一年	陸奥守・征夷大將軍・按察使	從三位坂上田村麻呂	見(補任)
	鎮守軍監	外從五位下道島御楯	十二月八日見(類史)
延曆二十二年	陸奥大掾	清原長谷	正月任(補任天長八年条)
	出羽權守	從五位下三諸綿麻呂	五月十七日任近衛少將守如元(補任弘仁元年条)
	征夷大將軍・按察使	從三位坂上田村麻呂	七月十五日(補任)
延曆二十三年	陸奥守・征夷大將軍・陸奥出羽按察使	從三位坂上田村麻呂	八月七日見(後紀)
	征夷副將軍	正五位下百濟教雲	正月廿八日任(後紀)

百済王氏の東北補任	延暦二十四年	征夷副將軍	從五位下佐伯社屋	正月廿八日任(後紀)
		征夷副將軍	從五位下道島御楯	正月廿八日任(後紀)
		越後守	從五位下和氏繼	正月廿四日任(後紀)
		陸奥權少目	正六位上上毛野賴人	十月十四日見(平27)
	大同元年	征夷大將軍按察使	從三位坂上田村麻呂	六月二十三日見(後紀)
		陸奥守・征夷大將軍・按察使	從三位坂上田村麻呂	四月十八日(補任)
		越後守	從五位下和氏繼	正月廿八日任(後紀)
		越後守	從五位下田中八月麻呂	四月十二日任(後紀)
		越後守	從五位上百濟王聰哲	五月一日任(後紀)
		越後介	從五位下紀百繼	正月十三日任(補任弘仁十三年条)
		越後介	從五位下安倍笠	五月一日任(後紀)
	大同二年	陸奥大掾	藤原長岡	嘉祥二年二月六日条見(続後紀)
		征夷大將軍・按察使	從三位坂上田村麻呂	見(補任)
	大同三年	陸奥介鎮守將軍	從五位下百濟王教俊	六月九日任(後紀)鎮守將軍七月四日見(後紀)
		陸奥權介	從五位下坂上大野	六月九日任(後紀)
		征夷大將軍	從三位坂上田村麻呂	見(補任)
		鎮守副將軍	從五位下坂上大野	五月廿八日任(後紀)
		鎮守副將軍	外從五位下道島御楯	六月九日任(後紀)
		越後守	正五位下百濟王聰哲	六月九日兼任刑部大輔(後紀)
		越後守	從五位下紀良門	六月廿一日任(後紀)
		越後介	從五位下紀百繼	七月任(補任弘仁十三年条)
	大同四年	征夷大將軍	從三位坂上田村麻呂	三月廿九日叙正三位(補任)
		鎮守將軍	從五位下佐伯耳麻呂	正月十六日任(後紀)
	弘仁元年	陸奥守	從五位上佐伯清峯	二月廿三日見(三代格)
		征夷大將軍	正三位坂上田村麻呂	見(補任)
		越後守	從四位上秋篠安人	九月十八日任(後紀)
	弘仁二年	陸奥守	從五位上佐伯清峯	三月廿日見(後紀)
		陸奥介・征夷副將軍	從五位下坂上鷹養	三月廿日見(後紀)征夷副將軍四月十七日任(後紀)
		陸奥少掾	大伴国道	正月十一日任(補任弘仁十四年条)
		出羽守・征夷副將軍	從五位下大伴今人	三月廿日見(續紀)征夷副將軍四月十七日任(後紀)
		出羽介	藤原長岡	嘉祥二年二月六日条見(続後紀)
		出羽介	從五位下藤原浜主	七月廿三日任(後紀)

鎮守將軍・征夷副將軍	從五位下佐伯耳麻呂	三月廿日見(後紀)四月十七日任征夷副將軍(後紀)
鎮守副將軍	外從五位下物部匠蹉足繼	三月廿日見(後紀)
征夷將軍・陸奥出羽按察使	正四位上文屋綿麻呂	四月十七日任(後紀)陸奥出羽按察使五月十九日見(後紀)
越後守	從四位上秋篠安人	六月一日兼任左兵衛督(後紀)
越後守	正五位下御室今嗣	七月廿三日任(後紀)

寧=寧樂遺文 平=平安遺文 正倉院=正倉院文書 補任=公卿補任
 統紀=統日本紀 後紀=日本後紀 統後紀=統日本後紀 三代格=類聚三代格

城十二門の一つに佐伯門(後の藻壁門)が存在するが、これはその職掌ゆえである。また、奈良期には太宰帥となった佐伯今毛人や、惠美押勝の乱に功績のあった佐伯伊多智などの優秀な武官を輩出している氏族である。

大伴氏。

久米部や鞆部などを率いて宮門を守り、物部氏と共に軍事を担当した氏族。伴部を構成する最も有力なもので、大伴部は三十数国に分布している。室屋は清寧朝では星川皇子の乱を平らげ、磐・狭手彦・咋は軍事で功を挙げている。壬申の乱では、馬来田・吹が大海皇子側に付いて活躍した。宮城十二門の一つに大伴門(後の朱雀門)が存在するのは、この氏族が軍事に秀でていたためである。

藤原氏。

乙巳の変より後、常に朝廷に置いて中心となり政治を主導してきた氏族。蔭位制によって多くの氏人を官人として輩出する。強大な軍事動員権を有する官職に当代一の権門勢家が任命されるのも当然のことであろうし、その人数ゆえ東北関係の官職に多く補任されるというのも、自然なことであると考えられる。

紀氏。

応神・仁徳朝に角、雄略朝に小弓、雄略・顕宗朝に大磐、欽明・崇峻朝では男

麻呂が現れ、朝鮮との闘いで活躍する。また、紀氏とその同族が阿波・讃岐・伊予・周防・豊前に広く分布することから、紀水門を起点に四国沿いの瀬戸内海航路を確保し、水軍を率いて外征に重要な役割を果たした氏族である。

上毛野氏。

仁徳天皇五十五年に蝦夷が叛いたので上毛野田道を遣わしたが、蝦夷に破られ伊寺水門で没した。後、蝦夷が再び反旗を翻し、田道の墓を暴くと、大蛇が現れて蝦夷を食い殺した。また、舒明天皇九年にも、蝦夷が反乱を起こしたので上毛野形名を將軍として征伐させたが逆に敗れ、その妻が形名の遺品である十の弓を張り数十の女に命じて鳴弦させ、蝦夷を撃退した等とあるように、上毛野氏は古くから対蝦夷戦争に従事してきた氏族である。また、神宮皇后四十九年に荒田別と鹿我別を遣わして新羅を討たせた事や、仁徳天皇五十三年に上毛野竹葉瀬と田道が新羅征伐に加わったこと、天智天皇二年には、上毛野君稚子が前將軍として百済救済戦争に参加するなど、古くから外征にも力を発揮した氏族である。彼らの本拠地上対蝦夷戦争では、地理的に近い上毛国から兵士を動員し、速やかに戦地へ送りたいという朝廷側の要因にも合致していたと思われる。

坂上氏。

渡来系帰化氏族である。奈良時代には恵美押勝の乱で功を立てた苅田麻呂や対蝦夷戦争で活躍した田村麻呂を輩出した氏である。また、この氏は代々武を尊ぶ家柄であり、それが東北関係官職への補任に繋がったと考えられる。さらに、田村麻呂には従者（私的な兵）が多く、朝廷としても実に適材適所の人物だった。

石川氏。

古代の中央豪族である蘇我氏の流れを汲む氏族。従三位右大弁石足、その息年足は御史大夫正三位兼文部卿神祇伯、その弟の豊成は中納言兼宮内正三位卿右京大夫。さらに、年足の息名足は中納言従三位兼兵部卿皇后宮大夫左京大夫大和守を歴任するなど、藤家同様朝廷の中心にいた氏族である。そのため、多く東北関係の官職に補任されたものと思われる。

多治比氏。

反正天皇の湯沐邑として置かれた丹比部を支配する役目を負った氏族である。また、丹比連と称し丹比部を率いて天皇に近侍し、食事や警備の事に当たった。このことから、東北関係の官職に補任されたものと思われる。平城宮・平安宮に丹比門があるのは、多治比氏の職掌からである。

安倍氏。

古代陸奥の在地豪族。神護景雲三年三月十三日に白河・賀美・標葉三郡の人に安倍陸奥臣を、安積郡の人に安倍安積臣を、信夫郡の人に安倍信夫臣を、柴田郡の人に安倍柴田臣を、会津郡の人に安倍会津臣を賜姓したのをはじめとして、宝龜三年七月十七日・同四年二月八日・承和七年二月十六日・同十一年正月八日・貞観十二年十二月九日にも安倍某と賜姓されている氏族が存在する。陸奥の豪族を朝廷側に引き込むことで、東北の現地の文化・地理に精通している人物を指揮官として多数送り込むためだと思われる。

道島氏。

蝦夷出身者は、都から派遣されてくる官人とは異なり、土地勘や彼ら独自の地縁・血縁が存在するので、それら

を用いて朝廷の政策に協力してくれるであろうとの思いから、官人として登用・補任された。

このように、東北関係の官職によく補任される氏族を見ると、補任される理由と言うものが分る。古代から武を尊び軍事の面で朝廷に仕えてきた氏族。これはもちろん、対蝦夷戦争の指揮官として東北に補任するのは彼らとしても、また朝廷としても適材適所の人事であった。次に、常に朝廷の中心に居て、氏族内から数多くの官人を輩出してきた氏族。かれらには氏人が多く、常に官人としてのポストを求めるものが多い。氏長者や朝廷で高位に居る者の支持もあり、東北関係の官職にも補任されることが多かったと考えられる。そして、東国や東北出身の氏族。かれらに関しては古くから朝廷に仕えている貴族には無い、土地勘や地縁・血縁を利用する、地理的な近さから兵の動員・物資の輸送に手間が掛からない等の理由から、登用されたと考えられる。すべて、朝廷として、対蝦夷戦争を遂行するために必要な人材を補任するためであり、その結果が、表1のような補任事情になったと考えられる。

では、これら右記に示されたような理由をもたない百済王氏が、東北関係の官職に十一名も補任されている理由は、どこにあるのだろうか。次節では、その点を考察する。

百済王氏の補任

先行研究でも指摘されてきたことではあるが、対蝦夷への戦争が始まり、それが集結するまでの間、百済王氏はその一族の多くが東北関係の官職に世襲的に人材を輩出してきた。表2は対蝦夷戦争中の天平十五年から大同三年までの間、百済王氏が東北関係の官職に補任された年代・官職・人物名を表したものである。百済王氏は、国司よりも鎮守將軍や征夷副將軍など、軍事指揮者としての活躍が目立つ。このことから、百済王氏が他の伝統的大和系

氏族とは異なる、独自の知識や技術を有して、蝦夷と最前線で戦闘を繰り広げる官軍の指揮者としての能力を朝廷から期待され、その期待に見事応えうる能力を有していた証明になるのではないかと考える。

百済王氏と同じ帰化氏族の坂上氏も、帰化以前の氏族独特の技術や伝統を伝えていることは先に挙げたとおりである。百済王氏も帰化から数代を経ても尚、帰化以前の技術や文化を子孫に伝えること⁽⁹⁾に成功している。

また、その一例として、百済王氏の官人としての特色を理解するために、聖武期に活躍し『続日本紀』に薨伝記事が載せられている百済王敬福の

表 2

年	官 職	姓 名
天平十年(738)	陸奥介	百済王敬福
天平十五年(743)	陸奥守	百済王敬福
天平十八年(746)	陸奥守	百済王敬福
	陸奥守	百済王敬福
天平勝宝元年(749)	陸奥守	百済王敬福
	出羽介	百済王三忠
天平宝字七年(763)	出羽守	百済王三忠
天平神護二年(766)	出羽守	百済王文鏡
	出羽守	百済王武鏡
宝亀十一年(780)	鎮守副將軍	百済王俊哲
延暦四年(785)	出羽守・鎮守副將軍	百済王英孫
延暦六年(787)	鎮守將軍	百済王俊哲
延暦十年(791)	征夷副使・鎮守將軍	百済王俊哲
	越後介	百済王忠信
延暦十六年(797)	出羽守	百済王聰哲
延暦二十三年(802)	征夷副將軍	百済王教雲
大同元年(806)	越後守	百済王聰哲
大同三年(807)	陸奥介・鎮守將軍	百済王教俊
	越後守	百済王聰哲

経歴を見ていきたい。

天平十一年四月戊寅 栄爵に叙せられる。

天平十五年六月丁酉 陸奥守に補任。

天平十八年四月己酉 上総守に補任。

天平十八年九月癸亥 陸奥守に補任。

天平十八年閏九月乙酉 從五位上に昇叙。

天平勝宝元年四月甲午朔 黄金九百両を献上し、從三位に昇叙。

天平勝宝二年五月辛丑 宮内卿に補任。

天平勝宝四年五月辛未 常陸守に補任。

天平勝宝四年十月戊寅 檢習西海道兵使に補任。

天平勝宝八歳五月丙辰 聖武天皇の崩御に伴い、山作司に任ぜられた。

天平宝字元年六月壬辰 出雲守に補任。

天平宝字元年七月庚戌 橘奈良麻呂の変に際し、孝謙天皇の命により、大宰帥船王等五人と共に諸衛人等を率いて獄囚の防衛に当たり、囚人の尋問を行う。

天平宝字三年七月丁卯 伊豫守に補任。

天平宝字五年十一月丁酉 南海道使に任命される。対新羅戦のため、紀伊・阿波・讃岐・伊豫・土左・播磨・美作・備前・備中・備後・安藝・周防等十二國の船一百廿一隻・兵士一万二千五百人・子弟六十二人・水手四千九百廿人を調査する。

天平宝字七年正月壬子 讃岐守に補任。

天平宝字八年十月壬申 兵部卿和氣王・左兵衛督山村王と共に外衛大將として兵数百を率い、勅命により淳仁天皇を淡路国へ。

天平神護元年十月辛未 紀伊国への行幸時、天皇の身辺警護として御後騎兵將軍に任命される。

天平神護元年十月戊子条 天皇が弓削寺に行幸された時、本国舞を披露。

天平神護二年六月壬子 六十九歳で薨。

敬福は聖武天皇から寵愛を受けた臣下であつた。对新羅戦争の準備段階にあつた時は檢習西海道兵使に任じられ、聖武天皇の崩御に伴い、山作司に任ぜられた。橘奈良麻呂の変に際し、孝謙天皇の命により、諸衛人等を率いて獄囚の防衛に当たり、囚人の尋問を行う。南海道使に任命され、对新羅戦の準備を行う。外衛大將として兵数百を率い、勅命により淳仁天皇を捕縛する。紀伊国への行幸時、天皇の身辺警護として御後騎兵將軍に任命される。また、軍団の改革^⑪を行つていた。

以上のことから、敬福の職務は対外戦争の準備・内乱時の犯人の捕縛や尋問・天皇に近侍しての警護を主な職務としていたことが分る。これは、武人として、軍の指揮官として兵学に通じていたことを示している。これはやはり、百済王家より伝えられてきた知識・技術であろう。

朝鮮半島に居住していた時からの文化を、帰化以降も脈々と受け通でいた^⑫ことから考えれば、その技術を持つての東北への補任であつたと考えられる。

敬福から時代は下り、桓武朝になると、百済王氏の東北関係官職への補任もそれ以前とは異なつた向きが見える。それ以前は、国司に補任されていた者が、桓武期には鎮守將軍等の遠征軍指揮官としての補任が目立つようになる。これは、先ほどからも述べてきたような百済王氏が先祖伝来の独自の知識や技術に優れていたということもあるが、桓武天皇の「百済王等者朕之外戚也。」^⑬という言葉が最も大きかつたのであらうと思われる。つまり、桓武帝から外戚と称された百済王氏は、桓武朝の二大事業（東北遠征と平安京造営）のうち、自らが得意とする東北遠征にさらに力を注ぎ、直接軍を率い対蝦夷戦争へ邁進していったのである。

また、百済王氏と藤原氏の国司以外つまり軍事指揮官たる官職に補任された人物を比較してみると、以下のようなになる。

藤原氏は、藤原宇合・藤原麻呂・藤原朝篤・藤原継縄・藤原小黒麻呂。

百済王氏は、百済王俊哲・百済王英孫・百済王教雲・百済王教俊となり、人数の上では藤原氏のほうが多い。しかし、延暦元年以降藤原氏が軍事指揮官たる官職に補任されていない点と、この対蝦夷戦争が激化し長引いたことから、後半戦の軍事指揮者にはそれに精通した氏族が補任されることとなった。その結果の一つが、延暦元年以降の百済王氏の補任に繋がっているのである。

この様に、他の大和系の氏族と異なり、半島からの独自の技術や文化と言うものを相伝してきた百済王氏には、他の東北関係の官職に多く補任されている氏族とは異なる理由で、その地位を獲得していったのである。

対蝦夷戦争終了後の補任

対蝦夷戦争終了に伴い、大規模な軍事動員を行う必要が無くなる。結果、それを指揮する鎮守府將軍という官職の存在自体にそれ以前との意味合いが変化し、戦争中は頻繁に国史に補任例が認められていたのが、弘仁三年以降あまり当該官職への任官記事が見えなくなる。

また、蝦夷戦争終了後の百済王氏の経歴を確認してみると（叙位記事には百済王の名前を認めることができるのだが）当時の官職についていたか分る史料は少ない。六国史では以下の三例が確認できるのみである。

天長五年、右馬大充百済王善義¹⁵。

元慶三年正月、和泉守百済王俊聡¹⁶。

元慶三年、右馬大充百済王教隆¹⁷。

百済王氏は『拾芥抄』¹⁸に記されているように、河内国交野郡に置かれた禁野の管理を任されていたので、都に出て

官職に就くものが少なかったものと思われる。その中でも任官が認められた者は京官や国司に補任されており、東北地方の官職には補任されていない。これは、蝦夷との実戦の可能性が低くなったからであり、無理に彼らを東北に押し留める理由がなくなつたからである。この例からも、彼らが実戦において実力を発揮する氏族であつたことが分る。また、朝廷側もそのように認識していたから、このような補任の形になつたと考えられる。

さいごに

百済王氏が東北関係の官職に補任される事例が多い理由を述べてきた。

それは、天皇や宮を警備し、軍を率いて遠征を行い、戦果を挙げてきた氏族や、朝廷の命により古来より蝦夷と戦鬪を繰り広げてきた氏族、朝廷の中心として権力を握りその人事権を行使して多数補任されてきた氏族等が補任された理由とは異なる。百済王氏は坂上氏と同様の帰化氏族であり、多く当該官職に補任された理由は、彼らが氏族内で伝えてきた帰化以前からの知識や技術にあつた。その知識や技術を用いて対蝦夷戦争に於いて活躍してくれるであろうと言う朝廷側の期待が、これらの補任に表れているのであり、また、百済王氏側もその期待に応えるだけの技量を有していたが故に、軍事指揮官たる官職に任命され、東北の地に赴いていったのである。

註

- (1) 本論では、軍事指揮権を持つ陸奥出羽按察使・鎮守府・陸奥出羽に派遣された軍使等、そして、『令義解』職員令大国条「(前略)其陸奥。出羽。越後等国。兼知饗給。征討。斥候。(略)」とある。陸奥国司・出羽国司・越後国司はその職掌として対蝦夷政策を担わされて
- (2) 村尾次郎「奥羽建設と百済王氏」『日本諸学研究報告』第十七編歴史学に所収。(文部省数字局編・1942)
- (3) 今井啓一氏「百済王氏と蝦夷経営」『続日本紀研

いたことから、これらの官職を東北関係の官職と表記する。

究 511 (1958)

(4) 利光三津夫・上野利三兩氏「律令制下の百済王氏」

『法史学の諸問題』(慶応通信・1987)

(5) 榊原聖子氏「帰化人の研究―特に百済王氏を中心として―」『皇學館叢書』283 (1995)

(6) 『日本後紀』弘仁二年十月甲戌条。「甲戌。勅征夷將軍參議正四位上行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰。省今月五日奏狀。斬獲稍多。歸降不少。將軍之經略。士卒之戰功。於此而知矣。其蝦夷者。依請須移配中國。唯俘囚者。思量便宜。安置當土。勉加教諭。勿致騷擾。又新獲之夷。依將軍等奏。宜早進上。但人數巨多。路次難堪。其強壯者步行。羸弱者給馬。」

『日本後紀』弘仁二年十二月甲戌条。「甲戌。詔曰。天皇詔旨良麻止勅命乎。衆聞食止宣。陸奥國乃蝦夷等。歷代涉時弓。侵亂邊境。殺略百姓。是以掛畏柏原朝廷乃御時尔。故從三位大伴宿祢麻呂等乎遣弓。伐平之米給比支。而餘燼猶遣弓。鎮守未息。又故大納言坂上大宿禰田村麻呂等乎遣弓。伐平之米給不尔。遠聞伊村乎極弓。略掃除弓之可止毛。逃隱山谷弓。盡頭弓究殄已止不得奈利尔太利。因茲正四位上文室朝臣綿麻呂等乎遣弓。其覆傾勢尔乘弓。伐平掃治之牟流尔。副將軍等。各同心勦力。忘殉心以弓。不惜身命。勤仕奉利。幽遠久薄伐。巢穴乎破覆之弓。遂其種族乎絶弓。復一二乃遣毛無。邊戎乎解却。轉餉乎毛停廢都。量其功勞波。上治賜尔足止奈毛御念須。故是以其仕奉狀乃重輕乃随尔。冠位上賜比治賜久止宣天皇御命乎。衆聞食止宣。(略)」

これらの記事によって、対蝦夷戦争が終了したことが分かる。

(7) 『日本後紀』弘仁二年五月丙辰条「丙辰。大納言正三位兼右近衛大將兵部卿坂上大宿禰田村麻呂薨。(略)率部落内附家世尚武。調鷹相馬。子孫傳業。相次不絶。田村麻呂。赤面黃鬚。勇力過人。有將帥之量。帝壯之。延曆廿三年拜征夷大將軍。以功叙從三位。(略)」

(8) 註釈(7)と同。「但往還之間。從者無限。人馬難給。累路多費。」とある。

(9) 『日本書紀』皇極二年癸卯是歲条「是歲。百済太子餘豐以蜜蜂房四枚放養於三輪山。而終不蕃息。」これは、當時倭国にはなかつた技術を百済王氏が有していた例。

『続日本紀』天平十六年二月丙辰条「丙辰。幸安曇江遊覽松林。百済王等奏百済樂。詔授无位百済王女天從四位下。從五位上百済王慈敬。從五位下孝忠。全福並正五位下。」

『続日本紀』天平神護元年十月戊子条「戊子。幸弓削寺礼佛。奏唐高麗樂於庭。刑部卿從三位百済王敬福等亦奏本國舞。」

『続日本紀』延暦六年十月己亥条「己亥。主人率百済王等奏種種之樂。授從五位上百済王元眞。善貞。忠信並從五位下。正五位下。正六位上百済王元眞。善貞。忠信並從五位下。正五位下藤原朝臣明子正五位上。從五位下藤原朝臣家野從五位上。无位百済王明本從五位下。是日還宮。」

(10) 『続日本紀』天平神護二年六月壬子条「壬子。刑部卿從三位百済王敬福薨。放縱不拘。頗好酒色。感神聖武皇

帝殊加寵遇。賞賜優厚。時有土庶來告清貧。每假他物。望外与之。由是。頻歷外任。家无餘財。然性了辨。有政事之量。天平年中。仕至從五位上陸奥守。時聖武皇帝造盧舍那銅像。冶鑄云畢。塗金不足。而陸奥國馳驛。貢小田郡所出黃金九百兩。我國家黃金從此始出焉。聖武皇帝甚以嘉尚。授從三位。遷宮内卿。俄加河内守。勝寶四年拜常陸守。遷左大弁。頻歷出雲。讃岐。伊豫等國守。神護初。任刑部卿。薨時年六十九。」

- (11) 『統日本紀』神護景雲二年九月壬辰条「壬辰。陸奥國言。兵士之設機要是待。對敵臨難。不惜生命。習戰奮勇。必爭先鋒。而比年。諸國發入鎮兵。路間逃亡。又當國春運年糧料稻卅六万餘束。徒費官物。弥致民困。今檢舊例。前守從三位百濟王敬福之時。停止他國鎮兵。點加當國兵士。望請。依此舊例點加兵士四千人。以停他國鎮兵二千五百人。又此地祁寒。積雪難消。僅入初夏。運調上道。梯山帆海。艱辛備至。季秋之月。乃還本鄉。妨民之產。莫過於此。望請。所輪調庸。收置於國。十年一度。進納京庫。許之。」

(12) 注釈(8)と同。

(13) 『統日本紀』延暦九年二月甲午是日条

(14) 『日本後紀』弘仁三年二月己亥条「(略)外從五位上物部臣蹇連足繼爲鎮守將軍」

『文德実録』卷二嘉祥三年八月己酉条「己酉。右兵衛督正四位下坂上大宿祢清野卒。清野。贈大納言正二位田村

麻呂第四子也。少慣家風。武藝絕倫。嵯峨太上皇。在東宮時。年十八爲春宮少進。是時。天皇御武德殿。特簡天下騎射拔群之士廿人。覽其才品。爰清野以春宮少進。獨忝其選。又命步射士佐味香飾麻呂。飯高常比麻呂。清野等三人競射。清野爲三人之先鳴也。天皇甚奇愛之。弘仁十年正月叙從五位下。爲陸奥鎮守將軍。年纔廿七。十一年爲陸奥介。十三年爲右近衛少將。十四年十一月。叙從五位上。天長元年左貶爲薩摩守。俄而遷爲土左權守。入京之後。十年三月叙正五位下。爲陸奥出羽按察使。夷民和親。關塞無事。承和三年罷官歸都。即爲右馬頭。數年遷爲右兵衛督。兼爲因幡守。十二年正月叙從四位上。兼爲相摸守。嘉祥三年四月叙正四位下。齡稍遲晚。老病相迫。有意避官。未言氣絕。時年六十二。」

(15) 『統日本後紀』承和元年五月己巳条「己巳。授主殿允正六位上物部臣蹇連熊猪外從五位下。爲鎮守將軍。」

(16) 『日本後紀』天長五年十月己巳条

(17) 『三代実録』元慶三年正月七日丁酉条

(18) 『三代実録』元慶三年十一月廿五日庚辰条

『拾芥抄』卷中 宮城部第十九「禁野 北野有別当交野以百濟王爲檢校 宇陀野」とある。

本稿は「古代・中世史研究会(佛教大学内)」での発表を元に論文化したものである。